

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成21年度派遣報告書

——インドネシア共和国・ハサヌディン大学, インドネシア語, H21. 11. 10-H22. 2. 14)——

平成21年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程2回生
阿瀬川 慧

自身の研究テーマについて

糖尿病はもはや先進諸国のみの病ではなく、開発途上国においても急増している。WHO の調査を基にした、インドネシア保健省(以下 DKRI)の発表によると、インドネシアは中国、インド、米国に次いで 4 番目に多い糖尿病患者を擁している。罹患率は全人口の 8.6%に及び、1995 年の 450 万人から 2025 年までに 1240 万人に増加すると推測されている[WHO,DKRI 2005]。それ故、糖尿病は国家レベルでも重要な課題となりつつあるのではないだろうか。こうしたことから、そもそも糖尿病がインドネシアにおいてどのように病として社会的に認知されるようになったのか、そして、国家はどのような対策を取ってきたのだろうか。

1986年7月1日、糖尿病に対する問題意識から国家主導でインドネシア糖尿病協会(以下PERSADIA)が発足し、これまでに11地域、92支局、172団体が創られた[DKRI]。しかし、情報収集整備体制が整っておらず、地域支局が独自の対策や調査を行っており、国家として有効な糖尿病対策が打ち出せないでいる[Jakarta Post 2003]。また、2006年に'Unite for Diabetes'が国連採択されたことにより、国際的に糖尿病対策の必要性が課題となり、インドネシアでも主要都市を中心に糖尿病患者自らが地域社会に対して、糖尿病についての啓蒙運動を活発化し始めているのである。

研修言語の概要

インドネシア共和国の国語としてのムラユ語に与えられた呼称。大多数のインドネシア人にとって、インドネシア語は学校教育を通して獲得した第二言語であり、母語ではない。スハルト政権下にて、インドネシア語著しく普及し、政権が終焉した98年にはインドネシア語を話せる人の割合は全人口の90%に近づいたとされる。

語学研修の内容について

語学研修は研修期間中の12月初旬～翌年1月の約1カ月半に渡って行われた。渡航から最初の約1ヶ月はジャカルタにおいて調査許可証発給手続きと調査を行い、語学研修終了後の約1ヶ月半は再度ジャカルタに滞在し、調査を行った。

語学研修は週2～3回、1回100分の講義であった。講義は文法を中心に行われたが、ネイティブの講義と

ということもあり、会話の講義も同時に受講していたとも言える。担当教員であったKahar先生は講義途中の雑談等で、イスラム教の考え方やそれを踏まえた現地の常識について教えて下さるなど、インドネシアで研究を行っていく上で避けて通ることのできない考え方についても学ぶことができた。

研修期間中、後半のジャカルタでの調査では渡航直後の調査よりも明らかにスムーズに会話できるようになっていたことを肌で感じた。



【Kahar先生の講義にて】

研修期間中に印象に残った体験や経験

インドネシア語は先述の「研修言語の概要」に記したように、多くのインドネシア人にとって、母語ではない。それ故、方言も顕著に言葉に表れるようである。受入れ機関であった、ハサヌディン大学のあるマカッサルでは普通「Ya(ヤ)」= (はい) と言うところを「Iyo(イイヨ)」と表現する。

マカッサルでの語学研修を終えて、いざジャカルタへ調査に向かった私が発した返事はもちろん「Iyo」であった。

【調査で訪問した先にて】

先方:「あなたはマカッサルにいたことがあるの？」

私:「はい(=iyo)。2ヶ月ほどいました。」

先方:「なるほどね。でもその返事ではジャカルタでは笑われるわよ～アハハハ！」

私:「Iy..Ya.分かりました。気をつけます！」

とは言っても、すぐに直る訳はない。きっと気付かぬ内にお店や屋台でIyoと言い続けていたであろう。方言とは中々抜けないものではないだろうか。私は今でも生まれ育った静岡の訛は抜けないでいるのだから。



↑【保健省,糖尿病対策部局の方々】



↑【保健省,非感染症対策部局の会議にて】

目標の達成度や反省点について

日常生活をする上での会話力は習得できたように思う。また、研究に関する説明も詳細に至るまでと

は言えないが,何を研究しているかは伝えられるようになった。今回の派遣を通じ、基礎が身に付いたことは間違いなく,耳も慣れたことで学習効率は渡航前に比べて明らかに上がっている。継続した学習を心がけ,更なる向上に努めたい。

最後に、日本学術振興会、ITP事務局と諸先生、ハサヌディン大学の諸先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

柴田 紀男. 2008. 「東南アジアを知る辞典」 p53